

2. ゴールデン・プラン実現の 歴史的・社会的条件

関 春南

はじめに

「Sport for all」発展の物質的基盤となったドイツの壮大なスポーツ施設建設計画・ゴールデン・プランは、いかなる歴史的・社会的条件のなかで実現したのか。本稿は、その解明に迫るための予備的考察である。

I. ゴールデン・プラン出現の歴史過程

ゴールデン・プランは、1960年に忽然と現れたものではない。それは、戦前からの長い歴史の積み重ねを経てやっと日の目を見たものである。

この原型は、1916年第一次大戦中までさかのぼる。当時は「遊戯場法」というかたちで検討されていた。⁽¹⁾ すなわち、カール・ディームと都市計画家マルティン・ワグナーとの間で検討されており、1916年6月ドイツ帝国オリンピック委員会に提出され審議されている。その内容は、人口規模に応じて遊戯・スポーツ場、スポーツ施設を建設するというもので、住民一人あたり、既存の1平方メートルに代わって、最初は3平方メートル、後に5平方メートルの遊戯場・スポーツ場、0.1平方メートルの体育館床面積、そして、人口3万人に一つの水泳プールを建設するというものであった。

この法律は、当時の政治的、経済的情勢のなかで成立しなかったが、トゥルネン、スポーツ、遊戯場建設の必要性に対する認識は高まり、1925年には、この面積は全国平均1.56平方メートルに増加した⁽²⁾。その後、第2次大戦に突入。そして敗戦を迎え、戦後の新たな歩みが始まる。すなわち、1950年12月、統一組織・ドイツスポーツ連盟(DSB)の成立。51年1月、ゴールデン・プランを提出したドイツ・オリンピック協会(DOG)の成立。55年各州文部大臣、地域スポーツ団体、DSB理事会の協議による「学校体育促進に関する

勧告」が発表される。同年、ドイツ都市会議から「地域スポーツ奨励に関する基本的な考え方」が発表される。56年、DOGと都市計画・建築家とスポーツ専門家との協力によって、「5000人以上の住民をもつ地域における遊戯・スポーツ・レクリエーション施設と都市建設規模(1)」が作成される。58年、ドイツ都市会議スポーツ部会より、「遊戯・スポーツ・レクリエーション施設と都市建設」が発表される。59年、DOGと都市計画・建築家とスポーツ専門家との協力によって、「5000人以上の住民をもつ地域における遊戯・スポーツ・レクリエーション施設建設規模(2)」が作成される。同年、ドイツ都市連盟から、「地域スポーツ振興に関する基本的考え方」が発表される⁽³⁾。

以上の経過を総括したかたちで、1960年、DOGによって、「健康・遊戯・レクリエーションに関するゴールデン・プラン覚書」いわゆる「ゴールデン・プラン」が発表された。続く1961年、地域で立案・実行するための実施具体案と関係資料からなる第二の覚書「地域におけるゴールデン・プラン」が発表された。

II. ゴールデン・プランの提示と社会的状況

1. 国民、とりわけ青少年の身体の危機的状況の出現

西ドイツのいわゆる「奇跡の高度経済成長」は、日本より少し早く1949年から1958年までとされている。この間は、生活環境と労働環境は激変し、青少年の発育条件に大きな障害をもたらすようになった。そのことを「ゴールデン・プラン」は、多くの事例で示した。そのいくつかを示せば、次の通りである。

「今日、入学してくる子どもを調べてみると、二人に一人は慢性疾患障害をもっている。例えば、

州 別	男児	女児
ニーダーザクセン	36.8%	34.4%
ノルドライン= ヴェストファーレン	47.0%	43.5%
シュレスウィヒヒ= ホルシュタイン	54.5%	49.9%
ヘッセン	56.6%	55.3%

となっている。この増加率は、4年間に約10%であり、ノルドライン= ヴェストファーレン州などでは18%にもなっている。「生産勤労青少年の慢性疾患障害の割合も大体学齢児童の場合と同じように高い。すなわち、220万人の職業学校生徒のうち、約15万人が概して悪い状態であり、普通の状態の者が51%、良好な状態の者は僅か42%に過ぎなかった。「商業に従事している青少年で療養を必要としている障害は、足部疾患、姿勢異常、心臓障害、循環器障害、神経性四肢筋肉異常硬直症、神経障害であるが、これらは5年間に次のように年々ふえている。

年度	男子	女子
1953年	17.8%	18.0%
1954年	24.7%	26.3%
1955年	29.2%	31.2%
1956年	30.9%	32.2%
1957年	31.2%	34.4%

2. 緻密で科学的裏付けをもったプランの提示

こうした医学的データをもとに、「文明病が、ドイツ連邦共和国において急速に増加し、あらゆる階層、あらゆる年齢層に広がり、まさに憂慮すべき状態になっている。このまま放置しておけばドイツ国民の将来の発展を妨げる由々しき問題をもたらすことになるであろう」と、警告を発し、これを「予防するための主要な手段」は、「まずもって、体育館、広場、プールなどの施設を十分に作ること」であり、これがなによりも「前提条件である」としたのである。そして、ドイツのすべての自治体の人口規模に応じた必要施設数を算出し、これを15カ年計画で建設していくことを提起した。しかも、必要経費とその分担の割合(連

邦政府20%、州政府50%、地方自治体30%)まで提示していた。これがゴールデン・プラン・メモランダムである。

DOG 会長のゲオルグ・フォン・オペールは次のようにいう。「われわれは、このメモランダムによってドイツ連邦共和国の責任ある地位にある方々に対しアピールを行い、この危険を除くよう訴える。ドイツ人一般に現れた生物学的破滅の危機は、もはや看過することを許さぬ段階にきている。

保養施設、遊戯ないしスポーツ施設の建設整備は、ドイツ国民の健康増進および健康保持の前提である。ここで問題となるのは、選手を養成したり新記録を出したり、メダルを獲得しようとするような〈スポーツ〉ではない。そうではなく、子どもの遊戯、学校における体育および勤労者の保養に関する事柄が問題なのである」⁽⁵⁾。

3. 社会的承認 各級政府機関、政党、党首等の賛同、支持

ゴールデン・プランの発表は社会的に大きな反響を呼び起こした。とりわけ重要なことは、連邦政府、州政府、地方自治体とそれぞれの議会や各政党、さらには連邦首相までが、これに対する見解と支持の意向を表明したことである。その主なものを次に示したい。政府与党であるキリスト教民主同盟(CDU)は、いち早く反応を示し、ケルン大会(1960年)で「CDU ケルン宣言」を発表した。そのなかで以下の施設を要求していた。すなわち、1、近隣に子どもの広場と遊び場をつくること、2、ゴールデン・プランに即したスポーツ場、体育館およびプールの建設、3、広範な国土計画を作ること、町中により広い緑地帯を設けること。ドイツ社会民主党(SPD)は、SPD ボン臨時大会(1961年)で、次のように宣言した。すなわち、「自由時間の意義ある活用のために、われわれは、スポーツと遊びに必要な施設を要求する。...そして、DOGによって提出されたゴールデン・プランに対して、ただ肯定するだけでなく、力強くその実現を支持する」と。そして、ドイツ自由党(FDO)の市町村政策連邦会議もまた、1961年ゴ

ルデン・プラン支持を宣言した。

また、CDU/CSU ドイツ連邦会議幹部会議長ハイ
ンリッヒ・クローネは、DSB 連邦会議(1960年12
月10日)で、連邦首相アデナウアーは、CDU/CSU
市長村政策連合連邦代表者会議(1960年9月)で、
支持の表明を行った。

こうした政府の意向をふまえて、連邦内務大臣
シュレーダーは、1961年12月10日DSB 連邦会議で
1961年度予算に2000万DMの連邦資金を計上したこ
とを表明した⁽⁶⁾。

ゴールデン・プランと「第二の道」は、政党や政
府の強い支持を得ただけでなく、地域自治体、労
働組合連盟、新聞協会そしてドイツ主要企業の協
力を得て展開されたのであった。

Ⅲ. ゴールデン・プランの政治的・経済的条件

1. 冷戦の激化とブルジョア・スポーツ指導層

戦後急速に進行する東西の冷戦の激化に対して、
かつてのブルジョア・スポーツ指導者層は、自ら
の拠点としての組織を作ることの必要性を自覚し、
そこにかつての指導的人物の結集を図った。その
ような組織がドイツ・オリンピック協会(DOG)で
あった。

DOGの中心人物は、カール・ディームであった。
彼は、DRAの事務総長として「遊戯場法」をはじ
めとした諸計画の主導者であり、1936年ベルリン
オリンピックの組織者であり、戦後も大きな影響
力をもった人物であった。彼はまた、熱烈なナシ
ョナリストであり、頑強な反共主義者でもあった。
彼の言葉から、DOG設立の政治的意図を窺い知る
ことができる。彼は、スポーツ界の中でも社会主
義思想が広まり、州スポーツ連盟を中心にして社
会主義勢力が力を増してきている1945年から47年
の状況を目の当たりにして、保守的勢力の指導的
地位の奪還とそのための根拠地を築くことの必要
性を次のように述べた。「スポーツで指導的地位
を獲得すること、そして、唯物論の襲撃に対して
要塞を守っている人を助けることが、今日のわれ
われの課題である。もしこのことに成功しないな

ら、われわれは、大変な過ちを犯すことになる」
(⁸)と。このような認識のもとに、「あらゆる分
野でスポーツに影響を与えることのできる人物」
をDOGに結集したのである。中心的人物の名だけ
記せば、グイドー・フォン・メンデン(Guido von
Mengden)、ゲオルグ・フォン・オペル(Georg
von Opel)、コンスタンス・ジェルシェ(Constans
Jersch)、ヴィルヘルム・ガルベ(Wilhelm Garbe)
、ヘルマン・ヤンセン(Hermann Jannsen)など
である。

DOGの人的構図は、76年現在でも変わってお
らず、11名の幹部会委員のうち、6名は資本家階級
の代表、3名は政府高官、2名はスポーツ幹部で
構成されている。

国の支配層が、社会主義と共産主義への対抗を
強め、再軍備への道を急速に歩みはじめた丁度同
じ時に、DOGに結集したブルジョア・スポーツ指
導者たちは、「国民スポーツの振興」の具体的計
画であるゴールデン・プランを提出したのである。
かれらは、軍事力強化政策推進のためには、「国
民スポーツの振興」が必要なのだと認識していた。
ここには、支配層からみる政治的観点からのスポ
ーツの意味づけが如実にあらわれている。

クラウス・ティーデマン(Claus Tiedemann)は、
ゴールデン・プランがいつから支配層の必要性と
なり、DOGにより提示されていくことになったか
という点に関して次のように述べる。「遊び、ス
ポーツ、レクリエーション施設に対する一般的な
要求は、1950年代の半ばになってはじめて現れた
のではない。そうではなく、この時期になっては
じめてDOGによってその要求が捉えられたので
ある。つまり、それは経済的(労働者全体の健康の
危機)および軍事的(1956年徴兵制の制定、1959
年NATO加盟)理由から、支配層にとって、ゴール
デン・プランを拒否することが難しくなった時期
であった」と。そして、ゴールデン・プランの政
治的意図は達成されたかという問題にたいして、
ゴールデン・プランの「進歩的要素」(das prog
ressive Moment)が、支配層の考える政策的・欺
瞞的な機能(manipulativen Funktion)を抑え、

「政治的には僅かな機能しかもちえなくした」と見ている⁽⁸⁾。すなわち彼によると、50年代半ばまではDOGの中に、例えば、ゾルグ⁽⁹⁾やペテルセンなどの比較的進歩的な勢力が存在しており、また、下部組織の支部長などの中にも活発なグループが存在しており、彼らが計画に参与する余地があったこと、つまり、計画に対する「理想主義者」の存在が、ゴールデン・プランを圧倒的多数の住民の福祉に貢献するものにしていったというのである。

2. 「奇跡の高度経済成長」と住宅政策の展開

ドイツには「スポーツは、生活の中で、最も大切な副次物(die wichtigste Nebensache der Welt)(Horst Peets)という言葉がある。ドイツ人の生活観とそこでのスポーツ観を象徴している。スポーツは最も大切ではあるが、あくまで「副次物」なのである。生活で主要なものは、いうまでもなく、食料、住宅などの問題であった。

第2次大戦の戦場となったドイツでは、戦後住宅問題はとりわけ深刻な問題であった。全住宅の2割にあたる230万戸が壊滅した。さらに、東独、東欧諸国や旧ドイツ領などからの難民が1200万人と人口の2割に上った。これに対して、1949年誕生したドイツ連邦共和国(西ドイツ)政府は、ただちに「住宅建設を最緊急政策の一つとする」という声明を発し、住宅省を新設し強力に住宅政策を推進していった。50年代の住宅政策の展開(勿論この他に都市環境政策、労働時間政策などがある—生活の主要な問題の解決—)がなければ、60年代からのゴールデン・プランの展開はなかったであろう。圧倒的国民の支持は得られなかったであろうからである。そしてこの住宅政策の展開を財政的に支えたのが、「奇跡の高度経済成長」であった。

[注]

(1) Vgl. Beyer, Erich: Sport in der Weimarer Republik, in: Ueberhorst, Horst (Hrsg.): Geschichte der Leibesübungen. Band 3/2. o. J. (1982), S. 6

62. Diem, Carl: Weltgeschichte des Sports und Leibeserziehung. Stuttgart 1971, S. 988.

(2) Simon, Hans u. a. (Hrsg.): Geschichte der Körperkultur in Deutschland, Bd. 3, Die Körperkultur in Deutschland 1917-1945, Sportverlag, Berlin 1969, S. 90.

(3) 日本レクリエーション協会編『西ドイツ・黄金計画と第二の道—トリム運動への展開』1975年、1頁。

(4) Deutsche Olympische Gesellschaft(DOG): Memorandum zum "Goldenen Plan" für Gesundheit, Spiel und Erholung. Frankfurt a. M., 6. 1960. S. 3.

(5) DOG: a. a. O., S. 1.

(6) 以上の発言にかかわる引用は、DOG: Der Goldenen Plan in den Gemeinden. Wilhelm-Limpert Verlag, Frankfurt/M., Wien, 2. Auflage 1962. S. 14-16.

(7) Diem, Carl: Olympische Erfahrungen, in: Pädagogische Provinz 2, 1948, S. 741. vgl. Gehrman, Johannes: Der bundesdeutsche Sport und seine Führer, in: Vinnai, Gerhard (Hrsg.): Sport in der Klassengesellschaft, Frankfurt/M. 1972, S. 26-55. Tiedemann, Claus: a. a. O., S. 157.

(8) 以上DOGにかかわる引用は、Tiedemann, Claus: a. a. O., S. 155-169.

(9) Sorg, Heinrich. 戦前からの労働者スポーツ運動の指導者のひとり。戦後は、亡命の地ロンドンから帰国後、労働者スポーツ運動の指導者ヴィルドゥンク(Wildung, Fritz)のあとを継いで、統一スポーツ組織・DSB 実現のために努力した。民主主義的な思想をドイツ国民の中に作り出していくこと、その一環にスポーツもまた位置づく必要のあることを主張していた。Vgl. Sorg, Heinrich: Alter oder neuer Weg im Sport? Frankfurt am M., 1947. 拙稿「ドイツ戦後スポーツ改革の根本問題——フリッツ・ヴィルドゥンクの“戦後スポーツ構想”について(上)——」、一橋大学研究年報『人文科学研究29』1991年参照。